法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-02

豊田武先生を送る ： 豊田武先生略年譜・著書・論文目録

伊藤, 玄三 / NAKAO, Takashi / AKUTAGAWA, Tatsuo / ITO, Genzo / MURAKAMI, Tadashi / 中尾, 堯 / 芥川, 龍男 / 村上, 直

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
32
(開始ページ / Start Page)
55
(終了ページ / End Page)
68
(発行年 / Year)
1980-03-23

Hosei University Repository

豊田武先生を送る

豊田武先生は、昭和四十七年四月、史学科の非常勤講師としてご出講いただき、翌四十八年三月、東北大学文学部を定年退官されると翌四月から本学史学科教授に就任された。

以後、七年間にわたり史学科の学部・大学院の中世史を担当される傍、主任教授、また法政大学史学会会長として、史学科発展のために大きな足跡を残されたのであるが、本年三月をもって定年退任されることになった。豊田先生は古稀を迎えられたといわれても、ますます、お元気で研究を進められており、学生の指導に率先して当られている。退任後も、大学院の方へは引き続き非常勤講師としてご出講いただくことになっており、今後も史学科のために、ご尽力を願うこととなっている。次に先生のご経歴・ご業績を掲載、さらにお人柄の一端を紹介し、これまでの学恩にお報いしたいと思う。

豊田武先生略年譜・著書・論文目録

「略年譜」

明治四十三年三月九日　豊田八十代の四男として東京青山に出生
〃　四十四年三月　奈良市水門町に転居
大正五年四月　奈良女子高等師範学校附属小学校に入学
〃　九年八月　父の退職により青山の旧宅に帰り、青山小学校に転校
〃　十一年四月　東京府立第一中学校に入学
大正十五年四月　四年終了で、浦和高等学校文科乙類に入学
昭和四年四月　東京帝国大学文学部国史学科入学
〃　七年三月　〃　〃　卒業
四月　国史大系（後鑑）の校訂に従事
七月　文部省宗教制度調査に関する事務嘱託
昭和十四年一月　東京女子高等師範学校教授
〃　十六年十一月　臨時召集　十二月解除
〃　二十年十一月　文部省図書監修官、教科書局勤務
〃　二十一年四月　東京帝国大学経済学部講師、日本大学史学科講師

Hosei University Repository

昭和二十二年　四月　東京帝国大学文学部講師
〃　二十二年　九月　東北帝国大学教授に任命され、法文学部史学第六講座を担当する。（十月東北大学となる）
〃　二十三年　四月　文部省人文科学委員会委員を委嘱される
〃　二十六年　七月　〃　史料館専門委員に命ぜらる
〃　二十七年　四月　一橋大学教授（経済学部）を併任
〃　三十年　七月　「中世日本商業史の研究」により、東京大学から文学博士の学位を受ける
〃　三十四年　四月　アメリカ合衆国へ出張を命ぜられ、スタンフォード大学客員教授となる
〃　三十八年　六月　文部省史料館（現在国立史料館）評議員
〃　四十二年　八月　アメリカ・ミシガン大学で開かれた国際東洋歴史家会議に出席
〃　四十四年　四月　東北大学評議員に併任され、学部長代理をつとめる
〃　四十七年　三月　アメリカ・エール大学で日本中世史ゼミ指導
　　四月　法政大学非常勤講師に任ぜられる
〃　四十八年四月一日　東北大学定年退職、東北大学名誉教授に推薦される　同日法政大学教授に任命される　日本大学・上智大学非常勤講師
〃　四十九年　三月　高等学校指導資料（日本史）作成委員
　　七月　文部省国文学研究資料館評議員（今日に至る）
昭和五十年五月二十二日～六月七日　この間ヨーロッパ旅行、スペイン・イタリア・スイス・西独歴訪、ライン川を下る
〃　五十二年　一月　台湾旅行
〃　五十三年　一月　日本学術振興会奨励研究生審査委員
　　二月　中学校指導要領指導書（社会）作成委員
　　六月　三井文庫評議員
〃　五十三年　四月　国学院大学講師　今日に至る
〃　五十五年　三月　法政大学を定年退職

「著書・論文目録」

日本宗教制度史の研究　厚生閣（改訂第一書房）昭13
中世日本商業史の研究　岩波書店　昭18（昭26増訂）
概説日本歴史上・下　大阪教育図書　昭24
封建社会（社会科文庫）　三省堂　昭25
日本商人史　中世篇　東京堂　昭25
日本の封建都市（岩波全書）　岩波書店　昭27
堺　至文堂　昭32
武士団と村落　吉川弘文館　昭38
社会科教育法（共著）　学文社　昭44
A History of Pre-Meiji Commerce in Japan　国際文化振興会　昭44
苗字の歴史　中央公論社　昭46

Hosei University Repository

英雄と伝説　塙書房　昭51
日本史小辞典『家系』　近藤出版社　昭53
日本の封建制社会　吉川弘文館　昭55

校訂

香取群書集成(一)(二)　香取神宮　昭18
山科家礼記　一・二・三（飯倉晴武氏と共訂）　昭42
言国卿記　一・二・三（田沼睦・飯倉晴武氏と共訂）　昭44
相馬文書（田代脩氏と共訂）　以上　続群書類従完成会　昭54
神道大系　神社編20鶴岡（岡田荘司氏と共訂）　神道大系編纂会　昭54

編著及び監修

新日本史大系　第三巻　中世社会　朝倉書店　昭29
図説日本文化史大系8　安土桃山時代　小学館　昭31
日本の歴史　全十二巻　読売新聞社　昭34
体系日本史叢書　産業史1　山川出版会　昭39
〃　流通史1（共編）　山川出版社　昭44
〃　交通史1（〃）　〃　昭45
人物日本の歴史　全十四巻　読売新聞社　昭40
東北の歴史　上・中・下　吉川弘文館　昭42・45・54
高野山領庄園の支配と構造　巌南堂書店　昭52
酒田市史　上・下・史料編　酒田市史編纂委員会　昭29～
蕨市の歴史　一・二巻・史料編　吉川弘文館　昭34～
秋田県史　全十六巻　秋田県　昭35
三国町史　三国町史編纂委員会　昭39
会津若松史　全十二巻　会津若松史出版会　昭39
東北水運史の研究　巌南堂　昭41
明治以降宗教制度百年史　文化庁　昭43
宮城県議会史　第一・第二・第三巻　宮城県議会　昭43～
山形市史　山形市史編纂委員会　昭43
仙台市史　続編1・2　仙台市　昭45
中世の水運　徳田剱一氏の補稿　巌南堂　昭45
室町時代その社会と文化（ホール氏と共編）　吉川弘文館　昭52
会津家世実記　七冊まで　吉川弘文館　昭54
流域をたどる歴史　一―七　ぎょうせい　昭54
近世の都市と在郷商人　巌南堂　昭54

論　文

座・商業都市関係

大山崎油神人の活動「歴史地理」62の5　昭8
四府惣興丁座の研究「史学雑誌」45の1　昭9
座をめぐる論争の展開「歴史学研究」3　昭9
大和の諸座上・下「歴史地理」64の3・4　昭9
〃　続　「歴史地理」66の1・2・3　昭10
中世の鋳物業　「歴史地理」67の1・2　昭11
興福寺をめぐる建築業者の座「歴史学研究」36　昭11
琵琶法師の座「歴史教育」11の6　昭11
祇園社をめぐる諸座の神人「経済史研究」18の6　昭12
日本商業史　雄山閣版「新講大日本史」11所収　昭14

Hosei University Repository

中世の刀鍛冶雑考「歴史教育」15の3　昭15
商業史　中世　「社会経済史学」10の9・10　昭16
戦国諸侯統制下の座について「経済史研究」28の2　昭17
座および市場　平凡社「世界歴史大系日本中世」　昭18
中世における大陸織物の伝来「社会経済史学」13の11・12　昭19
西陣機業の源流「社会経済史学」15の1　昭20
都市及び座の発達　中央公論社版「新日本史講座」　昭23
人買い「日本歴史」11　昭24
中世における神人の活動「東北大学文学部研究年報」1　昭26
封建都市の成立と堺の豪商「一橋論叢」28の4　昭27
大工の座と建築の様式「日本歴史」14　昭29
Japanese Guilds　The Annals of the Hitotsubashi Academy Vol. V No. 1　昭29
封建都市の変容と都市共同体「一橋論叢」33の1　昭30
封建都市から近代都市「都市問題」48の1　昭32
都市における惣的結合の発達「史林」41の6　昭33
城下町の機能と構造　地方史研究協議会「日本の町―その歴史的構造―」所収　昭33
座と土倉　岩波講座「日本歴史」中世2所収
市民（自治）意識の形成過程「都市問題」56の5　昭38
東と西の封建都市「歴史教育」14―11　昭40
日本の自由都市堺「地理」23の5　昭41
図説　人物海の日本史7　堺の海商　毎日新聞社　昭53
楽市令の再検討「近世の都市と在郷商人」所収　昭54
戦国期地方の座　法政大学文学部紀要　昭54
武士団関係
惣領制覚書　「一橋論叢」38の4　昭32
関東武士の東北進出『風土記日本』第五巻　東北・北陸郷編所収　昭33
惣領制の解明　『具体例による歴史解明法』所収　昭35
〃　再論　「歴史」21　昭36
安東氏と北条氏　「弘前大学国史研究」30　昭37
惣領制　『日本史の問題点』所収　昭40
中世における相馬氏とその史料　「日本文化研究所研究報告」別巻3　昭40
北条氏と東北地方　「弘前大学国史研究」45　昭41
「晴宗公采地下賜録」とその考察（加藤優氏と共編）　「日本文化研究所研究報告」別巻4　昭41
北条氏と隅田庄　「中世史研究」2　昭42
東北地方における北条氏所領の研究　「日本文化研究所研究報告」別巻7　昭45
惣領制補遺　「鎌田博士還暦記念論文集」所収　昭45
挙兵前の新田庄　「史路」1・2　昭54
新田義貞は何故挙兵したか「歴史読本別冊」新人物往来社　昭54
時頼の廻国伝説　「歴史読本」一四ノ七　昭54
社寺関係
仏徒の神社観について　「神社協会雑誌」37の3　昭13
中世における出雲大社の信仰　「出雲」5　昭15
陰陽道　雄山閣版「異説日本史」所収　昭15
中世における神社の祭祀組織について　「史学雑誌」53の10・11　昭17

Hosei University Repository

教派神道の発達　「日本史研究」3の4　昭18
中世人の世界観　「秋大史学」3　昭28
東国における真宗の伝播　「日本歴史」65　昭28
神道的世界観の展開「千家尊宣先生還暦記念論文集」　昭33
塩釜神社史　中世　昭38
延暦寺の山僧と日吉神社神人の活動「法政史学26・27」　昭49・50
武士団と神々の勧請「法政大学文学部紀要」　昭50

社会・文化・その他

「田植草紙」を通じて見た中世社会「歴史学研究」1　昭8
狂言が描く世界―水論―「歴史学研究」3　昭9
文明十七・八年の山城国一揆「歴史学研究」27　昭11
湊川合戦の一史料　「歴史地理」65の5　昭11
中世における女性の勤労生活『女性と歴史教育』　昭12
中世における文化伝播の一方法に「日本教育史学会紀要」1　昭20
土一揆の基礎構造　社会経済史学会『農民解放の一考察』所収　昭23
中世の水運　「日本歴史」15・16　昭24
封建制の成立に関する諸問題「史学雑誌」58の2　昭25
織豊政権の成立　「思想」310　昭25
部落民の差別されるようになった歴史的事情　人文科学会「社会的緊張」　昭25
東北の荘園　「歴史」3　昭26
中世の天皇制　「日本歴史」49　昭27
封建的主従関係の変化「史学雑誌」62の10　昭28
封建制確立期の諸問題『現代歴史学の動向』所収　昭28

初期の封建制と東北地方『東北史の新研究』所収　昭30
初期の封建制下の農村　昭史会『日本社会史の研究』所収　昭30
日本封建社会の特色「日本歴史」88～89・95・96　昭30
中世の関東　『日本文化風土記・関東編』所収　河出書房　昭30
織豊政権　歴史学研究会日本史研究会「日本歴史講座」3　昭31
名の遺跡をたずねて「国史談話会雑誌」1　昭32
歴史教育の問題点　「変革と遺制」「社会科教育」6　昭32
中学校の歴史教育　―指導要領の改訂―「歴史教育」6の11　昭33
中世末期における大和の村落　「大和志」2の2　昭33
大名制とその社会　明治書院『日本文化史講座』4　昭33
仙台　和歌森太郎編『城下町』　昭37
平泉史料補遺　「日本文化研究所研究報告」別巻2　昭39
東北中世の修験道とその史料(山岳宗教史叢書出羽三山所収)　昭39
中世賤民の存在形態「日本大学史学会研究報告彙報」8　昭39
言継とその社会　「史学文学」5の2　昭40
家康公の遺業と東照宮「大日光」25　昭40
歴史家としてのサンソム氏「国際文化」131　昭40
義家と八幡宮　人物叢書「源義家」月報　昭41
日本中世史　国際歴史学会「日本における歴史学の発達と現状」II　昭41
元弘討幕の諸勢力について「文化」31の1　昭42
東洋歴史家の学会に出席して「国際文化」　昭42
堺と利休　「婦人百科」　昭44
巴御前・高師直・織田信長『新日本史の人間像』　昭45
中世における関所の統制「国史学」82　昭45

Hosei University Repository

中世における名子の史料「渡辺慶一氏記念論文集」　昭45
鎌倉・室町時代の武士の文化「月刊文化財」110　昭47
城下町を探る　「月刊文化財」129　昭49
歴史考古学への提言　「歴史手帖」42　昭52
戦後の日本史教育をふりかえって「歴史教育研究」62　昭54
経済と流通　小学館「図説日本文化の歴史」鎌倉・同室町・同安土桃山所収　昭54
中世の地名　歴史百科「日本地名辞典」所収　昭54
お伽草子の世界　集英社「図説日本の古典」　昭55

豊田武先生と私

村上　直

豊田武先生を私が直接、存じあげるようになったのは、昭和三十二年の一月頃からだったと思う。当時、先生は中教出版から高等学校社会科『日本史』の教科書を出版されていたが、私の恩師の北島正元先生もその執筆者の一人であったことから、教師用の指導書の一部を分担することになったのである。指導書にはかなり学界の動向を含めて執筆しなければならなかったので、何かと大変であったが、私にとっては研究書をよく読み勉強した時期であったと感謝している。その後、私は東京都立大学学術研究会の目黒区史専任編集員になり、区内の史料調査や採訪を行うことになったが、その頃には、目黒の碑文谷池の付近の先生のお宅をお訪ねしてご指導いただくことが多くなった。とくに目黒の地名の由来や宮城・福島県の目黒氏の系図についても調べていただいた。昭和三十五年になると区史編纂も執筆の準備に取りかからねばならず、大学の区史編纂室に先生をお招きして、九月には中世史研究会などを開いたりした。そのときには藤木久志氏（現在、立教大学教授）も大学院生で先生のお供をしてみえたように記憶している。また、私が偶然、探しだした蕨市史の関係文書を調べるため藤沢市辻堂にいた金沢さんという方のお宅を先生とお訪ねしたこともあった。このときもまだ大学院生であった丸山雍成氏（現、九州大学助教授）がお供をしてきた。

その他、確か夏の頃であったと思うが、先生と奥様を中心に北島先生と目黒郷土研究会の方と目黒区内の一部を史蹟調査のため歩いたことがあった。本当に楽しい一日であった。最近、古い写真を調べていたら、その時の写真がでてきて大変懐しく感じた。

私はその頃、甲斐の武田氏の研究や八王子代官・八王子千人同心などの研究に興味をもって、区史編纂の暇をみては調査して論文を時々『日本歴史』などに発表していた。そういうことで「武田家臣団の解体と蔵前衆」という論文が八月・一〇月号（昭和三十五年）に掲載されたことがあった。しばらくして、先生のお宅に区史のことで伺ったとき「甲斐の武田氏には蔵前衆などというなかなか興味深い武士団がいたのだね」と、論文の内容については余りほめては戴かなかったが、蔵前衆については非常に関心をもったことなどを話された。

豊田先生が注目されたということで、私はそれから大いに発奮

Hosei University Repository

して蔵前衆（代官衆）の研究に取り組み、甲州系代官の系譜をそのなかから探ってみることになったのである。当時の私たちは、豊田先生や児玉幸多先生が関心を示されたということは、非常に感激したものであった。つまり、これでようやく学界でも認められるようになったかと、密かに自信や希望をもつことができたからである。この年の十一月六日、私は東京大学の第五九回史学会大会で「近世初期における八王子千人同心について」と題する研究発表をはじめて行なったが、このときの司会を豊田先生にしていただいた。先生はそんなことはとっくに忘れられてしまったことであろうが、私にとっては生涯忘れることのできないことであった。学界は厳しいところである。まして、私のように研究を遅くはじめた者にとっては、随分、辛いこともあった。しかも、当時は東京大学の史学会で、他の大学の出身者が発表するということなどは、かなり勇気のいることでもあった。このような〝盲、蛇に怖じず〟で行なった研究発表がようやく最近になって実を結ぶようになったのである。

昭和三十五年といえば、先生が五十歳のときである。この頃の先生は、最早、日本の歴史学会の第一人者であり、中世史の権威であり、そのご高名は広く知れわたっていた。

それから十三年後、法政大学の史学科において先生のもとで私が講義を共に行うことになるとは、誰が予測したであろうか。本当に人間の生涯において、巡り合わせほど不思議なことはないと思う。昭和四十六年十月、私は法政大学文学部史学科の専任教員に移った。その前後から岩生・故丸山両先生の後任人事が史学科の大きな問題であった。当時、大学は紛争の最中であり、不安な日々の連続であった。十一月二十日夜、私は豊田先生のお宅をお訪ねし、法政大学の実情をご説明し、定年退官後またはそれ以前に法政大学への転任をお願い申し上げたのである。その後、竹内・河原両先生が正式に再度お訪ねになって、退官後に専任教授となられることをご承諾いただいたのである。

非常勤講師一年を経て、昭和四十八年四月から、豊田先生は史学科主任教授として、まさに史学科再建の中心となられた。それから満七年の歳月が夢のように過ぎ去った。先生は古稀を迎えられても、二十年前と少しも変らず、お元気に研究や後進の指導に当られている。そして、この在任七年間に、史学科教授として残された先生の足跡は、きわめて大きく、本当に計りしれないものがある。

学部のゼミの再編成、史学科教員の増員、考古学の科目の増加、大学院の講義・演習の拡充、研究会の育成、そして大学紛争で沈滞していた史学会もようやく生気を取りもどすことができたのである。その間、私が文学部長として、研究室をしばらく離れることもできたのも、先生を中心とした大きな史学科教員のバック・アップがあったからでもある。

先生は会議などでは、どちらかといえば余り多くは発言なさらない方である。しかし、一度、重要な事柄にたいする決定では、その発言には千鈞の重みがあった。史学科もこうした先生の存在に支えられていたのである。豊田先生の最終講演会での乾杯の際、竹内直良先生は「立派な先生は身近にあるときは余り感じ

Hosei University Repository

ないが、しかし、これがだんだん遠くになるにしたがい、その偉大さがよくわかってくるものである」と言われた。私たちは、そのことが、しだいに身にしみて感じる時が近づきつつあるといってよいかも知れない。藤井・板沢・岩生・竹内・豊田の諸先生の伝統を受けついでいくには、私たちには余りにも責任が重すぎるように感じられる。しかしながら、これまでの諸先生の学恩に報いていくことは、唯一つ、この困難な道を切り開いて史学科の発展に努力していくことであると思う。

豊田先生のご健康とご活躍を祈念しつつ擱筆とする。

豊田武先生のもとに学んで

伊藤　玄三

豊田先生にお会いしたのは、今から二十五年前になる。その時、私は東北大学文学部国史学科三年に編入学し、何はともあれ、専門的な歴史の勉強ができるという、いわば希望に胸ふくらむ心地で登校しはじめた時であった。ただ、自身としては考古学を専攻したいと考えていたので、その意味では国史学科の籍も便宜的であったということになろう。けれども、学科における講義は規定通りに聴講しなければならないことはいうまでもなかった。そのような中で、豊田先生にお世話になって最も印象深かったのは日本史演習である。

この演習は、三・四年生中心であり、遠山氏の『明治維新』をテキストとするものであった。確か、先生は中世史の御専門とうかがっていたが、何と現実は『明治維新』である。私としても、余り興味のもてない時代であったので、割当ての発表は程々に苦労させられたというところであった。もちろん、リポートの提出が最後に要請された。このリポートについては、奮闘した。図書館でオールコックやサトウの英文を抜書し、かなり時間をかけて外圧の問題を仕上げたのである。やや厚手のこのリポートの評点は如何にと大いに期待していた。ところが八〇点止りであり、それから一点も出ることはなかった。「あの努力あってこの点か」とかなりがっかりし、益々豊田先生の演習の印象が強くなった。

豊田先生に直接的にお話をうかがう事は、当時の学部学生の段階では仲々なかった。加えて中世史に志すものでもないともなれば、むしろ国史研究室からいち早く逃れて、考古学研究室へということになった。それでも、先生の講演などがある折には聴講に出かけ、先生の血色の良い、太られた姿を遠く拝見することがあった。言葉の終りの方が高くなる独特の表現が印象深かったが、お話の内容については殆んど覚えていない不肖の弟子である。

三年生の時には、恒例の関西旅行もあり、先生の引率の下に秋の奈良・京都を歩いた。先生は、現在でも健脚であるが、当時も学生の先頭に立ってどんどん歩かれた。そして、行く先々で現地の案内をする研究者達が待っており、詳しく説明をして頂いた。先生ならではのことと感じ入ったものである。この旅行の時にも、奈良での宿舎は「日吉館」であった。日吉館のおばさんに

Hosei University Repository

は、「最近の学生には礼儀知らずが居る」というお話を、一同正座してうかがったことも今とあまり変らなかったようである。豊田先生は、この旅行の途中で、急きょ帰京された。辻善之助先生のなくなられた知らせがあったからである。

学部時代には、そのようなわけで、講義以外で先生とお会いすることは余りなかった。それに加えて、私は専門が違うということで、先生にも、また学科の学生にもアウトサイダー的な見方をされていたのではなかったかと思う。よく「君は考古学だから」といわれることがあったからである。そこはそれ、コウモリと同じ論法で、こちらも都合の悪い時にはそれを逆用していたのであった。事実、私が三年に入ってからは、考古学研究室の発掘も多くなり、陸奥国分寺跡などの調査が始まっており、国史研究室には泥靴でひやかしに行くようなこともあった。

卒論の時には、古田良一・豊田武・伊東信雄の三先生の面接を受けた。豊田先生の質問は、「東北にも土師氏がいたかね」というものであった。土師器を出土する住居跡に関するものを書いたのであったが、そこまでは考えてもいなかったので、一瞬ギクリとさせられ、その後は全くの弁解となった記憶がある。先生は、今でも面接の時などは痛烈な質問をされることがあるが、同席している身としては「またやったな！」という感じでうかがっている。それらの度に、とかく先生の温顔に甘えている私には、冷厳な刃の片鱗をかいまみる思いがする。私には、先生は決して温顔だけではなく、厳しい一面があることが、あの時以来の印象として残っている、といえる。

大学院時代には、専門的な違いもあり、殆んど親しくお話をうかがうこともなく過ごし、京都へ就職した。その数年後に法政大学へ招かれ、再び豊田先生の下にお世話になることになったが、私としても意外なことであった。先生は、仙台の終り頃に害されたという健康も回復され、極めて御元気に活躍されていた。種々の企画の推進、学生への叱咤などは、かつてのものと同じと見受けられた。私に関することといえば、先生の構想では、法政大学において歴史考古学の分野を推進していきたいということであった。先生の専門分野においても、都市・荘園の調査の如きものがあるので、それらの方向に強く関心を抱かれたのであろう。私の非力から、今なおという状態で先生の御退任の時を迎えてしまったが、いつの日か先生に歴史的考察をしていただける調査を実現したいと念願している。

豊田先生の横顔

芥川龍男

先生の本学史学科専任教授としての在任期間は七年間という短期間であった。期間こそ短かかったが円熟期の先生に接し得たことは幸せであった。この間に接し得た先生の横顔の二、三を述べて先生をお送りすることにする。

まず先生は頗るお元気である。大学からの帰途や地方での学会

Hosei University Repository

の折に学生諸君と語らいながら歩を運ばれるのであるが、先生の足取りは決して早いものではない。それにもかかわらず一寸油断しているとはるか先の方をスタスタと歩まれているのである。信号のある所などに来ると、軽く両腕を構えられて歩度を早められるのである。お話によれば、毎朝お宅のそばの碑文谷公園で準備体操とマラソンに励まれているのである。「この頃は、私が体操の号令をかけているのですよ」と嬉しそうに話されたことが思い出される。

昔から学会などでお見受けした先生の印象は血色の良い丸々としたお顔で、今は肉がしまってなおかつ血色とつやのよいお顔をされている。健康そのものである。先生のねばりと持続力の源泉は朝のトレーニングにあり敬服にたえないものである。

また先生はロマンティストでもある。『日本宗教制度史』・『中世日本商業史の研究』等実証的な名著を公刊された先生が、『英雄と伝説』を執筆されている頃、「伝説や伝承には一笑には付せられないものがあってね」・「若い頃は文学的関心が強かったものだから」等々と申されたものである。これはまた先生の感覚を柔軟なものにしているのではなかろうか。とに角学生諸君と食事やお茶をともにしながら談論の時を過ごされるのを好まれる。終始にこやかに、何事にも関心をもたれて師弟の交わりというよりも、大先輩との語らいというふん囲気で、これが中世史専攻を志す学生諸君のまとまりをつけたことは大きなものがある。

いわゆる新しい芽の発見と育成に心を使われる先生のこのような態度こそ真の教育者であることを感得させて下さったこともしばしばである。学会の動向にも常に気を配られ、吾々後進や学生諸君のテーマに関係したものがあると知らせて下さったり、中世史研究会には毎回先生が学内外の先学を招かれて後進に学問的な幅をつけることに意を尽されるなどがそれである。

このような先生の御態度は、先生御自身の学問的関心の深さを示すものであって、当世流にいえば燃えてる先生であるといえよう。定年という言葉・制度に矛盾を感ぜざるを得ない。至らぬ後進に対する心労から少しでも解放される契機が定年であると思いなおせば、先生をお送りする寂しさを和らげてくれるものがある。

遅々たる歩みではあっても、先生の残された多くの教訓を着実に身につけてゆくべく努力することで御恩にむくいたいと念ずるものである。

深い学恩の数かず

中尾　堯

豊田先生にはじめてお目にかかってから、すでに二十五年にもなる。井上光貞先生のご紹介で門を叩いたわけであるが、この間の想い出は、とうてい筆舌に尽くせないほどである。厚顔にも私は先生のお宅にお邪魔してはご指導をいただくことしばしばで、論文をまとめた折には素直な感想と示唆を必ず与えていただいた。

Hosei University Repository

私自身が大学の教壇に立つようになってから、このような配慮がいかに有意義なものであるかを、身にしみて感じた次第である。若い研究者との触れあいの中で、歴史学へのいささかな貢献をもって、先生の深い学恩に報いることができることを夢みている。

この四年間、私が法政大学で日本仏教史の教鞭をとることができたのは、先生のお骨折りによるものである。先生が担当されている大学院の演習には、たびたび出席させていただいた。教室の雰囲気は、和やかさの中にも厳しさがあり、先生は学生の発言にそれぞれ適切な助言をされている。その味わいのある先生の指導ぶりに、大学教授としてのあるべき姿を見る想いであった。このようなことが契機となって、法政大学の学生諸君とも親しく交わることができ、有意義な非常勤講師の四年間を過ごさせていただいた。時折、卒業生とも会うことがあり、そのたびに豊田先生のことなどが必ず話題にのぼる。法政大学における先生の足跡の大きさを、しみじみと感じるこの頃である。

ところで、私が先生から受けた学恩は、社会経済史の方面もさることながら、宗教史においてさらに深いものがある。先生がお若い頃に著され、今や古典的名著となった『日本宗教制度史の研究』（第一法規から復刊）は宗教史の研究を志す者にとって必読の書に外ならない。私たちが進めている『明治仏教思想集成』の編纂においても、この書から随所に重要な示唆を受けている。これから近代仏教史の研究が進むにつれて、かつて文部省において宗教制度史の調査研究にあたられた先生の業績に寄せる期待は、まことに大きいといわなければならない。また、先生は戦前の宗教史研究に大きな役割を果たした日本宗教史研究会の重要なメンバーの一人であった。その業績に触発された私たちは、圭室諦成先生を中心に日本宗教史研究会を発足させ、先生を顧問にお願いした。この縁によって昭和三十九年の春に東北旅行を実施し、先生のお世話によって東北大学で一日の研究会を行なった。この席上には宗教学者として有名な故堀一郎博士もおいでになり、豊田先生ともども貴重なご指導を得たのである。この研究会はじつに豊かな内容をもち、同行したメンバーの中から今日すぐれた研究者数名が学界で活躍している。民俗学者として知られる宮田登氏（筑波大学）は、その著『メシヤ信仰』の序文の中で、この旅の意義について触れ、堀先生から重要な示唆を受けたことを記している。多くの研究者たちが、このように先生の学恩を、直接間接に蒙っていることは、いまさら多言を要しないほどである。

さまざまな意味で、先生に期待する人びとは、これからも確実に多い。古文書学会では機関誌の編集長としての大任を帯びておられるし、各大学へのご出講も数多いと承っている。深い学恩を受けた者として、先生がいつまでもご壮健で、常に変らぬ指導力を発揮していただきたいと念願する次第である。

Hosei University Repository

豊田武教授の最終講義

本学文学部史学科教授豊田武先生は、昭和五十五年三月三十一日をもって定年退任されることになった。ついては先生の学恩に感謝するため、二月九日（土）家の光ビル第二会議室（東京都新宿区市ヶ谷船河原町）で午後二時半から最終講義と懇親会が開かれた。

当日は安岡昭男教授の司会により進行し、第一部の最終講義は、村上直・主任教授から豊田先生の研究者としてのご経歴、ご業績および歴史学界におけるご活躍について紹介があり、引き続いて豊田先生の「一歴史家の歩み」と題する講義があり、多くの出席者に深い感銘を与えた。最終講義を終って、豊田ゼミ（中世史）を代表して相場優子さんから花束贈呈が行われ、河原正博教授の閉会の辞で最終講義が終了した。ついで記念撮影後、第二部の懇親会へ移った。

懇親会は、伊藤玄三教授の司会で、まず史学科を代表して村上直教授の挨拶。三井嘉都夫・元文学部長より、豊田先生についての讃辞があり、本学竹内直良名誉教授の音頭によって乾杯。引き続いて日本大学荒居英次教授、中央大学中田易直教授、立教大学藤木久志教授、本学の表章・芥川竜男両教授らが先生の学会における功績やお人柄につき、それぞれの立場からのお話があり、和気藹々のうちに懇親会が進められた。終りに豊田先生から謝辞が述べられ、倉持俊一教授の閉会の辞のあと、法政大学の校歌を合唱して懇親会を終了し、五時半に散会した。参加者一五〇名。

一歴史家の歩み

豊田　武

十九才の春、東大の国史学科に入学してから、はや半世紀を経過してしまった。その間に、戦争や大学紛争などがあって、研究もたびたび中断されたし、また研究の関心もいろいろに変化して来た。

歴史を志すようになったのは、やはり歴史のふるさとの奈良で少年時代をすごしたためであろう。父が万葉、叔父が日本仏教の学者であった関係上、高校のときには、国文学をやる積りでいたが、平泉博士の「中世における社寺と社会」などにひかされて、国史に進んだ。卒業論文には、「室町時代の商業」を選んだが、卒業後文部省の宗教局で宗教制度の調査にあたるようになった。宗教制度もやって見ると、なかなか面白い。檀家制度や寺領の問題など、未開拓の分野であり、明治初年の上知令や大教宣布の運動など、太政類典や社寺取調類纂など、豊富な史料を利用しての研究は、またやり甲斐のあるものであった。

いっぽう卒論で扱った中世商業の研究も、役所のあい間に許されて、史料編纂所に出かけてこれを続けた。内閣文庫から借り出されていた大乗院寺社雑事記百数十巻を拾い読みしたことも、今では考えられない苦労であった。京都大学の古文書室には、東大で採訪されてないような畿内の中世文書が多くあったので、学生時代からここに通って、赤松俊秀氏・清水三男氏等と親しくなっ

Hosei University Repository

た。市場・問屋・為替などの問題を一応体系化して、『中世日本商業史の研究』として、岩波書店から出版することができた。しかし考えてみると、産業史の分野など、まだ不十分であるし、市場の分布など、近世初頭の史料を利用してその連関を明らかにすべきであった。

卒論の第一部はできたが、第二部の方は「座の研究」として出す積りで、まだ出版にふみ切れない。座の論文としては、四府駕輿丁座を英国の初期のゲザンメルトギルドと対比して見た。大和の諸座や西陣の機業の源流など、新しい史料がどんどん出てくるので、もう一度やり直したい。脇田晴子さんや佐々木銀弥さんなど、最近は商業史に関心をもたれる方がかなり多くなった。網野善彦氏など、「私の鋳物師に関する偽文書の研究」を乗越え、供御人などのいわゆる非農業民の世界を対象として、新しい研究を出しておられる。能楽の座などをあわせて、是非とも「座の研究」を大成したい。

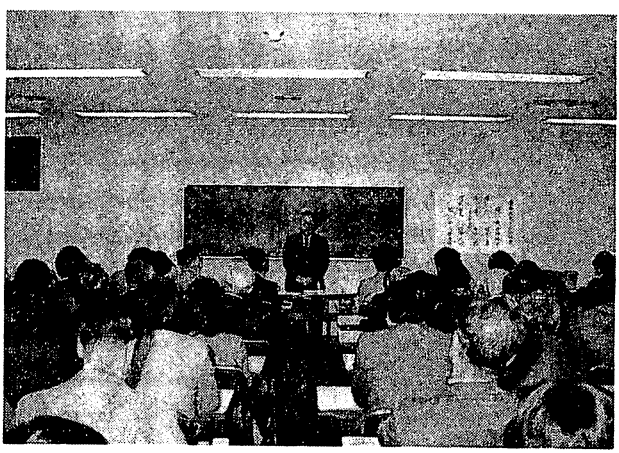
商業史は当然都市の研究と結びつく。京都・奈良・宇治山田などにおける惣的結合の発展を論じたが、とくに堺について、今井宗久や小西隆佐を通して、自由市の姿を明らかにした。自由市だけを問題にせず、堺とその周辺の農村との関係を考えることが大切である。織豊政権に対して堺など都市の豪商がどのような寄与をなしたかは封建王政の問題ともからんで、今後いっそう活発になる問題であろう。封建都市の研究は、小野均氏の名著『近世城下町の研究』によって開拓されているが、私も、岩波全書に頼まれたのを機会に、全国の城下町について、あらゆる市史町史から必要資料を抜き出して、くみたてて見た。その構想は仙台城下の研究から生み出された。仙台に住み、城下町の雰囲気を味わったことがこの何よりのヒントとなった。仙台ばかりでなく、秋田や会津若松の市史編纂を引受け、福井県の三国や山形県の酒田の市史の監修をやったことも、城下町との対比を考える上で、役に立った。今後は城下町の中枢ともいうべき配給や輸出の機能にも研究の手をのばして行きたい。一昨年から北陸都市学会が組織され、北陸諸都市の比較研究が進んできたことも、地方都市の研究を促進させるものである。

武士団と村落、東北大学に奉職するようになってから、東北六県をあげての農村や水運の綜合調査を企画したり、それらに参加

Hosei University Repository

する機会が多くなった。岩手県地方における名子の遺制や山形県下の在家の調査も、その一つである。在家については、かつては石母田正君あたりによってそれが奴隷的性格をもつものとされていたが、在家の実態を明らかにした結果、名主と同内容のものでありながら、把握の方法の違うことがわかって来た。九州の在家について工藤敬一氏も同様の見解をとっておられ、今日では在家研究はほぼこの線に沿うて進められている。

武士団の構造が惣領制的同族結合をなしていることは、学界のほぼ一致した見解であるが、これを農業経営と結びつける方法は松本新八郎氏によってはじめられ、私もこの方法を前進させた。私がヒントを得たのは、農村自治史料研究会の綜合調査のあと、連講の高知大学の学生を引率して、土佐の槇山部落や大忍荘の調査をなしたとき、名田の経営が惣領の本名と庶子の脇名の協同になることを見出してからのことである。その後この惣領制が一族の共同体的性格から、家父長制的家族に変化しつつあり、惣領権と家父長権とが一致することを明かにした。ところが最近鈴木国弘氏が、初期の一族が男系と女系の混合であることを実証された。私の惣領制論はいっそう深みをましたわけである。

武士団の移住を研究しているうち、名（苗字）の分布を調べることの重要であることがわかって来た。梶原姓の分布から鎌倉幕府の水軍のあり方を知ることもできた。北条氏の得宗領についても、入間田・遠藤両君の援助によって研究を進め、時頼の回国伝説との関係を解くことができた。元弘・建武の内乱の前提を考える場合にも北条氏の得宗領の研究は重大である。新田義貞の挙兵・楠木和田連合戦線の結成も、北条氏勢力の滲透を抜きにしては考えられない。

私としては、室町時代における惣村の発達と宮座との関係、山城国一揆と土一揆の基礎構造についても多少明らかにしてきた積りである。ただこの半世紀の研究が多くの方々の御力添えによってなされたことを感謝するとともに、いささか間口の広くなったこれらの研究を、退官後、いくつかにまとめて発表し、もって諸賢への御礼に代えたいと念願している。